

## シンポジウム開催趣旨

中国は今や国際社会においてその重要度を急速に増すとともに、責任大国としてその姿を登場させつつある。中国企業の海外進出や多国籍化の問題を始め、エネルギー・環境問題、農村食料問題、さらには地域安全保障をめぐる問題、文化相互理解の問題など、懸案となる諸課題は枚挙に暇がない。こうした情勢に応じて、中国自体も世界に向けて自国の歴史と現在の実情についてより深い理解を求める姿勢を強め、「世界中国学」の構築を呼びかけるようになっている。

これに対して戦後、地域研究の一部門として開始した国際社会の側の中国研究は、依然各国ごとに個別分散的に展開されており、必ずしも中国に対する理解が深まっているとは言えない。そこには欧米文化と文明を中心に置いて、中国をその周辺の従属的位置に置いて、これをオリент（東方世界）と見なすオリエンタリズムがなお抜きがたく存在し、「中国脅威論」が旧態依然の「黄禍論」（Yellow Peril）の衣装をまとって繰り返すその姿を現す状況にある。

愛知大学はこうした中国理解あるいは中国研究の現状の弊害を打破するべく、2002年10月文部科学省の21世紀COEプログラムの採択を受けて「国際中国学研究センター」を発足させ、国際的に統一した枠組みを持つ「現代中国学」の構築を目指して研究交流面、人材養成面の両面で今日まで最大限の努力を重ねてきた。本プログラムに参加した人々は、世界8カ国2地域、累計200人に及んだ。

今回の国際シンポジウムはこのプログラムの当面の成果を総括する極めて重要な意義を有する会議となる。本シンポジウムは、過去5回にわたって開催された国際会議のこれまでの濃密な議論を踏まえて、さらに一步を進め、国際的に統一的な方法論を持つ「現代中国学」の実現可能性について最終的な結論を下すと同時に、経済、政治、文化、環境の各領域における具体的な諸課題について一致した見解を示すとともに暫定的なものであれ解決策を提示する会議となる。

愛知大学国際中国学研究センター所長  
21世紀COEプログラム拠点リーダー

加々美 光行